

活動型日本語クラスの実践 —より豊かな日本語教育をめざして—

細川英雄(早稲田大学大学院日本語教育研究科)
<http://www.gsjal.jp/hosokawa/index.html>
2009年12月19日(土)
九州日本語教育連絡協議会 2009年度12月研修会

活動型日本語教育とは何か
—その学習・教師・教室について

- 1 いつ始まったか
- 2 なぜ始まったか
- 3 どんな活動なのか
- 4 何が新しいのか
- 5 どうすれば変わるのか

「総合活動型日本語教育」の実際

考えるための日本語

問題を発見・解決する力とは何か

2003年3月製作
早稲田大学大学院日本語教育研究科
言語文化教育研究室

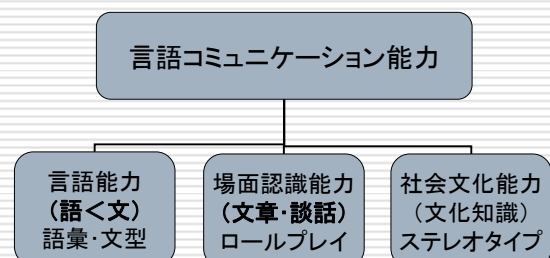
総合活動型学習ビデオの紹介

- 教室活動の手順
 - 1 興味関心のあるテーマを選ぶ
 - 2 対話活動
 - 3 話し合い(グループ活動)
 - 4 結論を出す(グループ活動)
 - 5 相互自己評価
- Video 1: 全体説明: このクラスでは何をするのか?
- Video 2: グループ活動例: ドイツ人学生の場合
- Video 3: 学生による評価

1 いつ始まったか

- 1 60~70年代「何を？」
教育内容重視、教師中心
- 2 80年代「どのように？」
教育方法重視、学習者中心、コミュニカティブ・アプローチ→プロジェクト・ワーク
- 3 90年代「なぜ？」
教育関係重視、学習者主体→新しい活動型日本語教育

2 なぜ始まったか



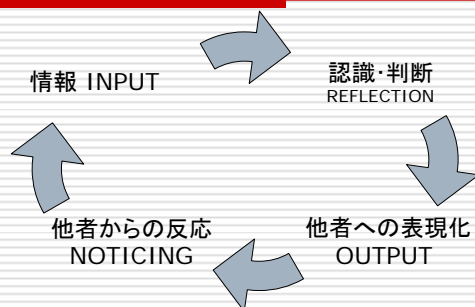
2 なぜ始まったか

- 部分から全体へ(語>文>文章・談話)
- 他者とのインターアクション・話者の内省は?
- 「異文化」への順応、適応強制のリスク

3 どんな活動なのか

- 全体から部分へ(テーマ/主題/動機>文章・談話>文)
- ことばと文化の統合(「文化」の境界を個人化する)。
- 自己の内省と他者とのインターアクションの活性化
- 活動の循環を螺旋状(スパイラル)に描く。

3 どんな活動なのか



3 どんな活動なのか

- 行為者acteurとしての学習者の活動
 - ・自分の考えを表現する。
 - ・他者の考えを聞く。
 - ・自分の考えを更新する。
 - ・複数の他者と自分、社会との関係について考える。
- 活動は、他者との交流によって活性化する。

4 何が新しいのか

- 教室は一つの社会
 - = 行為者acteurとしての日本語学習
- 社会における言語使用とは何か
 - = 自ら選び取る言語とその活動をめざす
- 自らのテーマの構築とその展望への期待
 - = 準備・応用を目的としない領域へ
 - = 母語・第2言語を超えた方法論へ

4 何が新しいのか

- 日本語教育の原点に帰る
 - 山口喜一郎(1872<明治5>-1952<昭和27>80歳)
 - 長沼直兄(1894<明治27>~1973<昭和48>79歳)
 - 木村宗男(1912<明治45>~2006<平成18>94歳)
- 「直接問答法」は、言語活動教育の原点

4 何が新しいのか

- 「直接問答法」再評価
- 肯定形(事物・概念と言語の関係の提示)
- 否定形(関係の揺さぶり)
- 疑問形(関係の確認)

- ことばは使用によって習得される。

4 何が新しいのか

- 「直接問答法」はなぜ廃れたか
- 技術的な習得困難
- 教材・テキストの整備
→「考えない教師」の誕生と増殖
- 構造と運用の乖離
→研究と実践の乖離

4 何が新しいのか

- 「直接問答法」を越える試み
- 言語の形の学習／教育を目的化しない。
- 相手のメッセージを聞き、考える。
- コミュニティとしての共同体をともに創るために何ができるかを考える。

5 どうすれば変わるのか

- なぜこの実践なのかという問い
- 活動の実施／公開
- 他者からのコメント／内省・振り返り
- 活動の設計／実施

- 実践と研究を統合する「実践研究」へ

活動型日本語クラスの実践 —より豊かな日本語教育をめざして—

ありがとうございました。

<http://www.gsjal.jp/hosokawa/index.html>
メールマガジン「ルビュ言語文化教育」にて毎週お会いできます。